

更に七丁程入った道ばたのけやきの大木に、いつの頃誰の手で彫られたかわからないが、観音菩薩の像が生木に浮き彫りにされ、里人は観音けやきと呼んで、お詔りしては第三の憩いの場と  
きめていました。

更に三丁ばかり坂道をのぼった山峽に、いつの頃か胴を採掘した坑道があり、夏でも坑内は涼しく、冬は暖いのでいつもこうもりが住みついでいて胴の沢と呼ばれ、第四の憩いの場となりました。

胴の沢からつまさき登りに溪流に沿って七丁ばかりいった谷間に、ひっそりと静まりかえった小さな池があつて、不思議なことに、池のほとりにある栗の大木は、枝が全部タラリと垂れさがり、くる年もくる年も沢山の実をつけたので、里人は万蔵が池の垂れ栗と呼んでいました。

また池には白泥鰯が住み、池畔には片葉の葦が密生し、附近を跳びかう鳥は白鳥ばかりでしたので、里人は長沢の滝、観音櫓、胴屋の古坑などとあわせて、長沢の七不思議と呼んでいました。

長沢の滝についてこんな事がいわれてきました。「むかしなあ、滝つぼの近くの丘の上にそれはそれはふるい大きな杉の木があつてなあ、酒つくりの名人が、この木で樽をつくつて、酒をつくつたら日本一の酒が出来るだろうと思つただと。そしてなあ、七人の木挽をつれてきて、七日のあいだ挽いたが、挽いても挽いても倒れなくてなあ、木挽たちは、おっかなくなつて七日目の